

序論

日本キリスト改革派教会では、大人が洗礼を受ける時、および幼児洗礼を受けた子どもが信仰告白をする時、また改革派教会以外の教会員が加入式を受ける時、次の六箇条の信仰告白を誓約しなければなりません（礼拝指針46条、49条）。誓約とは誓って約束することです。

洗礼式とは当人の願いに基づいて執行されるものですが、キリスト教会への入会式というよりは、神様の宣言の場です。すなわち神様が「お前は私の子どもである」と言われる宣言を、教会が表明する儀式です。ですから洗礼式の中で行われる誓約は、形だけの儀式ではありません。この誓約の言葉は、キリスト教の最も初歩的な教理を表明したものですから、私たちの信仰生活と教会生活の出発点となります。洗礼を受けようとする者は、聖書の教えをどのように理解しているかという、基本的理解の表明が求められます。私たちはその内容をよく理解し、神様と教会の前で心から信仰告白したいものです。すでに洗礼を受けた者も、今一度読み返して、自身の信仰を再確認しましょう。

信仰告白誓約の六個条

- 1、あなたは、天地の造り主、唯一の生けるまことの神のみを信じますか。
- 2、あなたは、自分が神の御前に罪人であり、神の怒りに値し、神の憐れみによらなければ、望みのないことを、認めますか。
- 3、あなたは、主イエス・キリストを神の御子、また罪人の救い主と信じ、救いのために、福音において提供されているキリストのみを受け入れ、彼にのみより頼みますか。
- 4、あなたは今、聖霊の恵みに謙虚に信頼し、キリストのしもべとしてふさわしく生きることを、決心し、約束しますか。
- 5、あなたは、最善を尽くして、教会の礼拝を守り、その活動に奉仕し、教会を維持することを、約束しますか。
- 6、あなたは、日本キリスト改革派教会の政治と戒規とに服し、その純潔と平和とのために努めることを約束しますか。

この誓約文の六カ条は、二つずつ三組に分けて考えることができます。

① 1、2 条・まことの神と私との関係。一神教（キリスト教、ユダヤ教、イスラム教）に

共通な個条。

② 3、4 条・キリスト教独自の信仰個条で、クリスチャンであることの原理を示すもの。

③ 5、6 条・教会とクリスチャンの関係を示すもの。

それでは、1〜6までの個条が並んでいる論理的順序立てを、それぞれの個条の文末の言葉を見ることによって考えましょう。前半の三つは「神を…信じますか」（1）、「罪を…認めますか」（2）、「キリストに…依り頼みますか」（3）ですが、後半の4〜6条の三つは「約束しますか」という言葉です。

（1 条） 私たちはまず信仰の対象である神様の存在を問題にしなければなりません。この神はどういうお方なのでしょう。日本の八百万（やおよろず）の神とどう違うのでしょうか。私たちは「聖書が紹介している」神を知り、この方を「信じる」のです。信じるとは単なる知的承認ではなく、この方の存在を受け入れるということ、そしてこの方を愛す

るということです。

(2条) 次に、私はこの方とどのような関係にあるのか、これからどのような関係をもつのが正しいことなのでしょう。私たちは、神を信じたら、自分の自己認識が変わるので、私はこの方が喜ぶような生き方をしているだろうか、という自己反省が起こってきます。これが自分の「罪を認める」ということです。

神を信じない者は、神のものさしで自分を計ることをしませんから、自分が罪人であることを知らず、認めもしません。従って罪から救われたいとも思いません。神を信じることと、自分が罪人であることを認めることは表裏一体です。私たちは、洗礼によって神の栄光をあらわし、神を喜び、神に仕え、神と共に歩むという、神との人格的な交わりの中に入れられるのです。

(3条) 聖書に紹介されている、いや聖書を通して私たちに語りかけて来られる神様は、私たちがどのように神様を礼拝したら良いのか、ちゃんと教えておられます。この方法で神を礼拝するのだから、神は私たちと関係を持つてくださらないという、神の側でお決めた方法があるのです。それが「神の子イエス・キリストに：依り頼む」という

方法です。私たちは罪から救われるために、神の発行された処方箋に従って、救い主に依り頼むのです。

以上が信仰の原理面で、次の4と6の個条は実践面です。私たちの行動が問題になりま
すから、これらの個条の末尾は「約束しますか」という言葉です。4条は、私たちが聖霊
の助けにより「キリストのしもべ」としてふさわしい生き方」をすることを約束するのです。
それはどのような生き方でしょうか。

5条と6条にそのことが具体的に教えられています。それは「礼拝厳守」「教会活動への
奉仕」「教会の維持」「教会の政治と戒規に服す」「教会の純潔と平和のために努める」こと
です。どの言葉にも「教会」という言葉がついているように、信仰生活の最大の現場は教
会です。私たちは、家庭、職場、学校などで過ごす時間の方がはるかに長いのに、この誓
約の個条ではそちらでの過ごし方を問題にしています。それは、教会での過ごし方がき
ちんと守られれば、その他の生活場面のことは当然守られるからです。それでは、誓約個
条の一つ一つを見ていきましょう。

1、あなたは、天地の造り主、唯一の生けるまことの神のみを信じますか。

誓約の第1項は、神の存在と私の関係です。信じるとは単なる知的承認ではなく、この方の存在を、私との関係において受け入れるということです。この誓約文では神に四つの修飾語がついています。①天地の造り主なる神、②唯一の神、③生ける神、④まことの神。

①□天地の造り主なる神

天地は自然に生じたものではありません。太陽も星も神様によって造られた被造物に過ぎません。しかし古代世界ではこれは全く異なる考え方でした。太陽はエジプトではラー、バビロニアではシヤマシユ、シュメールではウトウ、日本では天照大神（あまてらすおおみかみ）。月はバビロンではシン、シュメールではナンナと呼ばれ、最高に崇拜される「神々」なのです。

聖書の天地創造記事で強調されている点は、諸外国が神と崇める太陽も月も星も、それら自身が神のではなく、創造主なる神によって造られた照明道具に過ぎないということ

です。しかし古代世界でこんなことを言ったら、神冒瀆罪として死刑になってしまいます。命をもたらず太陽、闇を照らす月、諸外国が崇めるこれらの神々を「造った」方がおられる。ここには神話、迷信からの解放がうたわれています。「北斗やオリオンを、スバルや、南の星座を造られた」（ヨブ記9・9）神は今も、多くの恒星（太陽のように自ら発光する星）を、死滅した星から誕生させておられます。しかしキリストが再臨され、神の国が完成する時、神は今の宇宙とは全く違った「新しい天と新しい地を創造」（イザヤ65・17）されます。ヨハネはこれを幻の内に見たのでした（黙示録21・1）。

マクロの世界からミクロの世界へと視点を移せば、神様は世界で最も小さな種、からし種に命を吹き込み、これを大きな木に育てておられます。またミクロ・コスモスと呼ばれる人体の微細な構造を設計し、それを隅々に至るまで配慮しておられます。天地創造の時に造られたすべてのものは、神の目に「極めて良かった」（創世記1・31）のです。しかし、宇宙科学者カール・セーガンは著書『コスモス』で「進化」の現象について、「それほど有能な創造主なら、なぜはじめから（動物や植物の）最も良い種を作り出すことができなかったのか。化石（の存在）は、かつて試行錯誤があったこと、創造主が、将来を予測

する能力を持たなかったことを示している。」と言いました。

神様は私たちに創造の全貌を見せておられるではありません。神の被造物には試作品も改良品もありません。ノアの洪水前の世界がどのようなものであったか、私たちには知らされていないのです。しかし神に逆らう世界が減びたという恐ろしい事実を、聖書は語ります。地球上のあらゆる生命に命を吹き込まれる神が「息吹を取り上げられれば、彼らは息絶え、元の塵に戻る」（詩編104・29）。この厳粛な事実の前にひれ伏す者だけが創造主を崇めることができます。

②唯一の神

モーセは言います。「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である」（申命記6・4）。神は十戒の第一戒で「あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない」（申命記5・7）と命令され、「わたしが主、ほかにはいない」（イザヤ45・5）と断言されます。それではなぜ世の中には多くの「神々」がいるように見えるのでしょうか。それらは人間の願望を投射した「偶像」だからなのです。神話の世界では神々が戦ったり殺したり、

嫉妬したり結婚したり、また子供を産みます。これは唯一神教を採らない宗教世界に共通です。ギリシャ神話も『古事記』も、どの宗教においても同じです。人間が持つ様々な能力を突き詰めていったものが偶像になるからです。日本では特に、死んだ人が神になるという祖霊崇拜の信仰があります。これは創造主と被造物という区別と関係を知らない世界で起こることです。被造物にすぎない人間が成仏して神になれるというのは、人間が考え出した（作り出した）神だからです。

③ 生ける神

日本人の神観、宗教観では、神なる方はどこかの社（やしろ）や寺に鎮座ましまして動かない神です。この神と人間が会うのは、その社の年中行事の時、または人間の側で何か頼み事ができた時です。人は自分の都合で社へ出かけ、この神を礼拝し頼み事をします。その社に誰がどのようないきさつで祭られているのか気にしません。自分の全生涯をかけてこの神にお仕えしようなどとは思いません。私とその神とは「必要な時だけ」関われば良いのです。これがもつと簡単な関係になると「お守り」が登場します。神のある一部分

を上手に切り取ったものを作り、人間が利用できるシステムです。

聖書の神様は、私たちの全生涯を守り導く、人格ある方として紹介されています。この方はすべての被造物に命を与え命を取る方です。それはご自身が命そのものであられるからです。この方は私たちを造り、私たちと正面に向き合って相對して下さいます。物言わぬ偶像は死せる神。しかし聖書の神は「いつ呼び求めても、近くにおられる我々の神」(申命記4・7)。今私に、聖書を通して語りかけておられます。

毎週主の日の礼拝は「招きの言葉」によって開始されます。今生きて働いておられる神様は、主の日に、特別に私たちを礼拝に招いてくださいます。

④まことの神

「まこと」とは虚偽にたいしての真実を意味しますが、それ以上に、約束を守る誠実さ、私たちの悲惨さを憐れむ心、私たちを愛するという、神の積極性と人格性を意味します。聖書の神様は一度約束したことを決して違えることはありません。平気で神を裏切り、心

変わりする私たちなのに、神は変わることなく愛し続けてくださいます。神は「反逆の民、思いのままに良くない道を歩く民に、絶えることなく手を差し伸べて」（イザヤ 65・2）
こられました。この神の「まこと」は、私たちの信仰心の熱心さに左右されることなく、
神が神であるゆえに決して変わることがありません。

復活のキリストは「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている」（黙示録 3・20）と
言われるのに、「長く外部そとに立たせまつる、われら御民の心なさよ」（讚美歌 240 番）。あな
たも「閉ざせる門」を開き、この方を信仰告白と誓約によって、迎え入れて下さい。

2、あなたは、自分が神の御前に罪人であり、神の怒りに値し、神の憐れみに
よらなければ、望みのないことを、認めますか。

序論では、「神を信じることと、自分が罪人であることを認めることは表裏一体なのです」と学びました。この点が聖書の宗教の独特な点です。日本では年末年始になると、何と八千万人以上もの人々が、神社や寺へ初詣に行きます。有名神社では、人込みで賽銭箱にも近寄れず、人々の頭越しにお金を投げ込みますから、係員が「お金を拾わないでください」と放送しなければならないほどです。

あの人たちにとっての神は、とても近付き易い神です。商売繁盛、無病息災をと、自分の都合を勝手に注文する「祈り」をすることのできる神です。彼らは自分を「罪人」だなどとは思っていないでしょう。神と私の間には、罪によつて、越えることのできない「大きな淵」(ルカ 16・26)があると知っている人は誰もいないでしょう。彼らの神は、一年に一回だけのお参りで「御利益」を与えてくれる神なのです。人間が考案した人間中心の宗教では、真の神様がどのような方かを真剣に考えることもありませんから、従つて自分

を真剣に見つめることもなく、神と私の正しい関係を考えることもありません。

聖書は私たちすべてが罪人であると宣言します。私たちはここからスタートしなければなりません。「あなたは癌です」、「あなたはエイズです」と宣告されることは死ぬほど恐ろしいことですが、治療の見込みが全くないわけではありません。しかし聖書の神様に「お前は義ただしくない」と言われることは、ただちに恐ろしい滅びへの道です。

それでは神様は、私たちのどの点を「罪」だと言われるのでしょうか。ウェストミンスター小教理問答14問はこう教えています。「罪とは何ですか」。「罪とは、神の律法への一致に少しでも欠けること、あるいは、神の律法にそむくことです」。そうです、神のおきてがあるのに、私たちはそれを守っていない。だから罪人だと宣告されるのです。それでは神のおきてはどこにあるのでしょうか。それは聖書の中に明白に書かれており、そのおきては人間すべてを拘束します。私たちがすぐ思い出すのは「十戒」ですが、これは神様のおきての要約ですから、それで全部というわけではありません。神のおきてとは聖書全体なのです。

そして聖書が教えることは、私たちが「思い」「意志」「言葉」「行動」のすべてにおいて、

神様の前に罪を犯し続けているということ。私たちはあれこれと「思い」を巡らして計画し、一つの方向を決めて「意志」し、実行に移します。それは「言葉」や「行動」となって表面化します。これらのどの点においても私たちは罪の影響から逃れることは出来ません。しかし特別に神様がお嫌いになる罪があります。それは私たちの心の中の「傲慢」の罪、高ぶる心です。

紀元前7世紀、全世界の支配者ネブカドネツアル王は、バビロン王宮の屋上を散歩しながら言いました。「私の権力の偉大さ、私の威光の尊さ」。これを聞いていた家来がいたわけではありません。しかしこの独り言を聞いていた神は、ただちに恐ろしい罰を下しました(ダニエル4章)。この反対に、受胎告知を受けたマリアは「わたしは主のはしたためです」と身を低くし、「主は…思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし…」と、イスラエルの古い歌を歌いました(ルカ1・38、51)。パウロは「思い上がってはならない」「高ぶってはならない」と繰り返し注意しています(ローマ11・20、12・16、1コリント4・6、18、5・2、13・4)。

人間のすべての争いの根源はこの高ぶりにあります。自分は謙遜だと思っている人もあ

るでしょう。しかしそれを決めるのはあなたではありません。「人はうわべを見るが、主は心を見る」(サムエル上16・7、新改訳)。そして「神の怒り」は私たちの上に降りかかって来ます。昔、小学生の頃、父親に怒鳴られ、叱られたことを思い出します。何が原因だったか忘れましたが、父親の前で正座させられ、いつまでも怒られていました。いくら謝っても赦してもらえないのです。よほどひどいことをしたのでした。あの父親の態度が少しづつ変わったのは母親のとりなしによってでした。怒っている父親の態度が変わらない限り、私はその場から放免されません。神様と私たちの間をとりなして下さるのは誰なのでしょう。それは第3項の誓約で学びます。

聖書は神様の怒りそのものが無くなる方法を教えています。それは私たちが謝ったり、私たちが心を入れ変えることによってではありません。罪に染まってしまった私たちの心を、私たちが自分の力で変えることなど不可能です。それは神様ご自身が態度を変えて、私たちを「憐れんで」くださることによってなのです。その結果私たちには死の滅びから救われる「望み」が出てきたのです。

自分が神様に造られた被造物であることを忘れ、自分中心に生きる者は神から離れ、好

き勝手に生きていきます。神様からどんどん離れ、自分が罪人であることも忘れ、ついに神様のあわれみも拒否してしまいます。彼らの末路は永遠の滅びです。

人には必ず親がいます。その親にも親がいました。すべての人間の親である創造主によって自分が造られたことを喜んで信じる者は、自然に、自分が親の愛情にふさわしくない罪ある者であることを自覚します。「神を信じる」と、自分が罪人であることを認めることは表裏一体なのです。「これほどまでに私は神様から離れてしまったのか」と自覚し、悔い改める者が、実は神様の最も近くに、引き寄せられていることを悟ることができます。

大漁の奇跡を見てキリストを深く知った。ペトロは、「主よ、わたしから離れてください。私は罪深い者なのです」と告白しました(ルカ5・7)。あの時ペトロはイエスから遠く離れたと思います。だからこそイエスの心は、ペトロのすぐそばにあったのです。

神様のあわれみによって、私たちは自分が神のみ前から遠く離れていた罪人であったこと、従って神の怒りの対象であることを教えられました。このことを真剣に自覚した者は、神の最も近くに引き寄せられ、救いの望みの中に入れられるのです。

3、あなたは、主イエス・キリストを神の御子、また罪人の救い主と信じ、
救いのために、福音において提供されているキリストのみを受け入れ、彼
にのみより頼みますか。

この個条ではイエス・キリストが、私たちの「主」、「神のみ子」、「救い主」であることが言い表されています。イエスはローマ皇帝アウグストゥス治世下に（BC 27年～AD 14年）、およそBC 6年～2年頃にパレスティナで誕生し、ナザレという寒村で育ち、皇帝ティベリウス治世の第15年に、年およそ30歳で布教を始めた、歴史上の人物です（ルカ福音書2・1、3・1）。

イエス・キリストとは、キリストという家に生まれたイエスという、名前と名字ではありません。キリストとは「油注がれた者」という意味のヘブル語「メシア」のギリシャ語訳です。ユダヤ民族の間では、王、預言者、祭司が任職される時、神の力を表すオリーブ油を注がれました。ユダヤにはたくさんの王、預言者、祭司が登場しましたが、出エジプトのリーダー、モーセや、サムエル以外は、それぞれ単独の職務でした。ユダヤ民族は外

国によって迫害され続ける中で、三職をすべて兼ねた王「モーセのような預言者」の再来（申命記 18・15）を、つまり究極のメシアを待望するようになりました。イエスという固有名詞は「神は救う」という意味の人名「ヨシユア」のギリシャ語読みです。イエス・キリストとは「救い主メシアなるイエス」という、私たちの信仰告白を含んだ名前です。

イエスが誕生した時は、シーザーの養子の息子オクタ비아ヌス皇帝が、元老院からアウグストゥスという尊称を与えられ、41年にわたって世界に君臨した、ローマ帝国が最大の力を持った時でした。この世の支配者と宇宙の支配者である神の御子が、時間と空間の中で同時期に現れたのです。この二人は直接相まみえることはありませんでしたが、アウグストゥスのお気に入りであったユダヤ王ヘロデ大王と、その息子ヘロデ・アンティパスによって、イエスは生涯苦しめられ、ついにローマ総督ピラトのもとで十字架にかけられて殺されました。

しかし三日目に墓から復活し、四〇日間にわたって五百人以上の弟子たちに現れ、復活したことをはっきり示された上で天に昇って行かれたのです。この復活という歴史的事実の証言を「福音」と呼びます。福音とは幸福なニュースという意味です。

イエスが私のご主人様、「主」であること、また「神の御子」「救い主」であることは私たちの信仰の要です。神はなぜ二千年前のあの時に、イエスを地上に送って来られたのでしょうか。イエスは現代の我々と何の関係があるのでしょうか。

この世は、始祖アダムとエバの墮落以来、まことの神様から離れ、「神の真理を偽りに替え、造り主の代わりに造られた物を拝んでこれに仕える」（ローマ1・25）偶像礼拝者となってしまいました。ここに人類の不幸の根本原因があります。

この世の力は、歴史の中で様々な世界帝国として現れ競い合いましたが、最後・最大の力となって現れたのがローマ帝国でした。この帝国では公用語であるギリシャ語が採用され、すべての道がローマに通じるといふ交通網が完備されました。しかしこのことは神の準備された時として用いられたのです。公用語は福音の真理が正確に伝わることに役立ちました。道路網は、福音を全世界に宣教する伝道者たちを、国境によって閉ざすことなく、目的地まで安全に運びました。キリスト誕生のあの時は、神の時が熟した時でした。

ローマ帝国の最盛期、全世界のすべてがローマ皇帝にひれ伏していた時、神はご自分のひとり子を、人類の中に聖霊によって、女の胎に宿らせることによって誕生させられました。

た。それは「イエスという別の王がいる」（使徒言行録 17・7）ことを教えるためでした。

人類の代表アダムの違反によって壊れてしまった神様と人との交わりは、新しい人類の代表によって修復されねばなりません。しかし罪ある人間の中からは代表者を出すことはできません。なぜなら神様が「人はわたしを見て、なお生きていることはできない」（出エジプト記 33・20）と言われたからです。このままでは人類は滅びてしまいます。そこで神は私たちのために、神の前に立つことのできる罪なき神の子を、人類の唯一の代表者として、完全な「人」として送り込んでくださったのです。それが処女マリアの胎から「生まれる」という方法でした。死から復活したキリストは今も生きておられ、私たちクリスチャンの人生を導いておられます。クリスチャンとはキリストの所有物という意味です。

私たちは病気になる、医者にかかり、その医者の治療法と処方箋に従って病気を治します。その医者が名医であればあるほど、「この薬を飲みなさい」と言われれば柔順に従います。神は私たちの罪を除くために、私たちがキリストを信じるといふ処方箋を与えられました。私たちは「神の御子」キリストが私の「主」であり「救い主」であることを「信じ」、この方を「受け入れ」、この方に「より頼む」のです。

宮本武蔵は、吉岡一門との決闘の場に赴く時、路傍の地藏の前でふと立ち止まり、手を合わせて拝もうとするのですが、急にその手を止めてつぶやきます。「我、神を信じて神に頼らず」（吉岡英治著『宮本武蔵』、マンガ版ではありません）。何ともかつこいいセリフです。しかし「より頼む」こともできないような水臭い神なら信じる必要はありません。私たちはキリストを信じます。どのように信じるかというと、この方が私のご主人であると認め、お仕えし、救い主として受け入れ、私のすべてをこの方にお任せし、私の人生と生涯を導く方であるとしてより頼むのです。

ここまで自分のすべてを明け渡してしまうことができるのはなぜでしょうか。それはこの方が、私の支払うべき罪の罰を、私の身代わりとして、すべて十字架で支払ってくださいましたからです。これが福音です。誓約の第二項で私たちは「自分が神のみに罪人であり、神の怒りに値し、神のあわれみによらなければ、望みのないこと」すなわち滅んでしまうことを認めました。しかしもう大丈夫です。神様は私たちが滅んでしまわないように処方箋を与えてくださいました。それがイエス・キリストです。私たちは神様が調合してくださったこの薬を信じて飲めば良いのです。

4、あなたは今、聖霊の恵みに謙虚に信頼し、キリストのしもべとしてふさわしく生きることを、決心し約束しますか。

神、罪、イエス・キリストと学びを続けてきましたが、この項は聖霊についてです。神様が人類を救おうとなさる計画は、救い主イエス・キリストの登場によって最終段階に入りました。イエスは「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ」（ルカ 11・20）と言われました。イエスは十字架によってご自分が取り去られた後、どのように弟子たちを守ろうとされたのでしょうか。それはヨハネ福音書に明確に教えられています。「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。この方は、真理の霊である」（ヨハネ 14・16）。そして「父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊」（同 14・26）が、弟子たちの面倒を見てくれると約束され、これは教会の誕生日であるペンテコステの時実現しました（使徒言行録 2章）。

この時から、世界は神の国の完成を目指す「終末」に突入しました。私たちは今日この

日にでも、イエス様が再臨されるかもしれないという緊張感の中に生きています。聖霊なる神様は、そのような時代の中に生きる私たちのために、私たちの心の中に住んでくださり（一コリント6・19）、また教会の中に住んでくださり（一コリント3・16）、神の国完成を目指して、教会と私たちを日々聖めきよまわっていてくださいます。この方こそが、父なる神、御子イエス・キリストなる神とは区別された「聖霊なる神様」です。キリスト教会はこのことを「三位一体」と呼んで、神様には三つの人格（位格）があるが、しかし一人の神様なのだと言明してきました。教会が「父・御子・聖霊によって」という祝福の言葉によって、礼拝を終了するのはそのためです。

聖霊降臨によって、キリストの体なる教会ができ、私たちはこの教会に接ぎ木されて養われます。教会に内住される聖霊の働きによって、私たちは主の日の礼拝に招かれ、罪の赦しの宣言をいただき、御言葉とその説き明かしである説教と聖礼典によって、私たちは復活の主に出会い、聖徒の交わりをなし、新しい力をいただいてこの世に派遣されていくのです。

初代教会で洗礼式の式文に使われたと思われる「使徒信条」という文章があります（『讃

『美歌』556番参照)。そこでは「父・御子・聖霊を…信ず」と告白されていますが、聖霊に関するものは「我は聖霊を信ず」とだけ書かれていて一番短かいように思えます。しかし本当はその後に続く文章、「聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、体のよみがえり、永遠の命を信ず」は、終末時代の現在において、全部聖霊がなされる御業なのです。

もちろん聖霊なる神様はイエスの十字架の後、突然出現して来られたのではなく、実は旧約時代からずっと働き続けておられた神様です。天地創造の時にはカオス（混沌）の水の面をホーバークラフトのように「ホバリング」しておられました（創世記1・2の英語訳）。また「主の霊」はオトニエルやサムソンやサウルなどの上に「激しく降って」（士師記3・10、14・6、サムエル記10・6）イスラエルを救いました。この方が、父なる神とイエスから派遣されて、今は私たちの心の中と教会の中にずっと住んでいてくださるのです。ですから私たちは「聖霊の恵みに謙虚に信頼し」、この方が導いてくださるままに「キリストのしもべとしてふさわしく生きる」のです。

イエス・キリストはこの聖霊について不思議なことを言われました。「はつきり言っておく。人の子らが犯す罪やどんな冒讀の言葉も、すべて赦される。しかし、聖霊を冒讀する

者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う」(マルコ3・29)。これはイエスがなさるすばらしい奇跡の業は、神によってしか出来ない神の御業だと承知していながら、「悪霊の頭」の力で悪霊を追い出している」と中傷した律法学者たちに対して言われた言葉です。

昔読んだ新聞に、「東京で最も汚い川」として有名なある川を蘇らせるために、三つの方法が提唱されていました。まず下水を通して流れ込んで来る各家庭からの排水や工場の排水を濾過します。二番目に川の中のごみを取り去り、三番目に大量の水を流し続ける。近くを流れているもつと大きな川から水を引いて来てこの川に注ぎこませるのです。

この記事を読んでいて、まるで人間のようだと感じました。私たちの中にはこの世の汚いものがどンドン流れ込んで来ます。また心の中には罪という大きなゴミがあります。この「死んだ川」、私たちを蘇らせるために、聖霊は日々大変な労苦をしておられるのです。聖霊は私たちの心の目を開き、この世の汚れたものを汚いと識別させ、ゴミを取り去り、美しい水を日々注いでいてくださいます。そのおかげで私たちは少しづつ「聖化」されていくのです。

それなのに、そのような聖霊の御業を承知していながら、もし川の中に、ドラム缶いっ

ばいのダイオキシンをほうり込むような人間がいたらどうでしょう。そんな人間は極刑になるのが当然です。イエス様もこのことを言われたのです。聖霊の働きを承知していながら、故意に、あえてそれを中傷するのですから、極刑が待っているのは当然です。

神様は今生きておられ、今日も私たちに働きかけておられます。母親が毎日四六時中、赤ちゃんを見守るように、聖霊なる神様は私たちの日々の行動の一步一步を導いておられます。「エルサレム、エルサレム、：めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか」(マタイ 23・37)と嘆かれたイエス様は、「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしはその中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう」(黙示録 3・20)と私たちを招いておられます。私たちはどうだったでしょうか。罪の心で固く戸を閉ざしていたのではなかったでしょうか。しかしクリスチャンとなったあの時、どういうわけか私たちは戸を開いたのです。それは聖霊なる神様が、あの時イエス様の声を、私たちの心の中で大きく響かせてくださったからなのです。

5、あなたは、最善を尽くして、教会の礼拝を守り、その活動に奉仕し、**教会を維持することを、約束しますか。**

私たちは、天地の造り主、唯一の生けるまことの神を告白し（第1項）、自分が神の前に罪人であることを認め（第2項）、主イエス・キリストを受け入れ（第3項）、聖霊の恵みに謙虚に信頼し、キリストのしもべとして生きることを約束しました（第4項）。さて第5項は、その聖霊の恵みはどこでいただけるのでしょうか、という問題です。

一人の人が洗礼を受けてクリスチャンになるというのは、必ず教会を通してです。あなたはいつどこでキリスト教に触れたのでしょうか。友人に教会の礼拝に誘われた、特別伝道集会のちらしを見て行く気になった、ミッションスクールで教会訪問のレポートを書くように言われたから、などなど様々な理由があるでしょう。それらはすべて教会というクリスチャンの活動の場を通してのことです。

本屋で聖書や信仰書を見て、たとえば三浦綾子の本を読んで感銘を受けたとしても、それだけでクリスチャンになれるわけではありません。教会の礼拝に出席し、そこに集うクリ

スチャンたちの信仰を見て、私も彼らのようになりたいと思い、ある時洗礼を受けたいと願ひ出て、教会役員のインタビューをパスし、洗礼の誓約を公の礼拝の場で、会衆の前で告白し、牧師から水を注がれて（教派によっては全身を洗礼槽に浸して）、クリスチャンになるのです。

洗礼式はクリスチャン生活の出発点であつて卒業式ではありません。クリスチャンになった後も、信仰生活のすべては教会を中心に行われるのです。なぜなら信仰生活の原動力をいただくのは教会を通してだからです。日曜日の礼拝は、その週の労働を終えてやとたどり着く魂の休息の場ではなく、これから社会へ出て行くために、この世で働くためのエネルギーを充填する魂のガソリンスタンドなのです。礼拝の最後のプログラムは「祝福」ですが、これは「派遣」とも呼ばれます。クリスチャンたちは、週の初めの日に、復活の主招かれて礼拝に集い、そこに臨在される主に交わり、新しい力を与えられ、地の塩・世の光として、神の栄光を表す使命をもって霊の戦いに出ていくのです。

ですからあなたは「最善をつくして、教会の礼拝を守」るのです。電池がなくなつてしまった携帯電話は、重いだけで全く無用の長物になつてしまいます。同じように、私たち

クリスチャンも、教会の礼拝で新たに充電されなければ、肉体の外見は活動しているように見えても、魂は死んでいるのです。

教会とは建物のことではありません。クリスチャンたちの集まりの場です。その集まりがどんなに小さな群れであろうとも、なぜそれがキリストの教会と呼ばれるのか、それは「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」(マタイ福音書 18・20)と言われた主の臨在の約束があるからです。教会とはキリストを中心とした信者たちの生活と働きの場です。この集まりは「キリストの体である教会」(コロサイ書 1・24)とも呼ばれます。この活動の場が見える建物として現れてくる時、これを特に教会堂と呼びます。

日頃私たちはそれぞれの教会で礼拝を守り、そこにキリストの体が目に見える形で現れます。私たちができるだけ多くの人数によって教会堂に集まる時、キリストの体は一層明確に、人の目に現れてきます。信徒大会などの時には、千人以上ものクリスチャンたちが一同に集まり、キリストの体は巨大な体となって現れ、そこにキリストの栄光が現れます。8 教会 200 人の教勢で始まった日本キリスト改革派教会は、60 年後の現在約 140 の教会・伝

道所、一万人の会員数に育ちました。この成長の姿の中に、キリストの栄光が目に見える姿で現れています。

私たちが伝道するのは、もちろんキリストの大伝道命令（マタイ28・19、20）のゆえですが、教会の成長は数の上で現れるとともに質的な成長でも現れます。私たちは「教会の活動に奉仕」することによって、教会も自らも成長するのです。従って成長がない、または停滞している教会と信徒は、どこかに問題を抱えているのです。私たちはこの問題を自分のこととして深く考えねばなりません。なぜなら私たちは「教会を維持」する働きに参加しているからです。

現実社会の中でキリスト教会が活動するためには、様々な経費がかかります。一番大きな経費は牧師給です。定住の牧師がいない教会は「無牧」の教会と呼ばれますが、それでも光熱費、印刷費など様々な活動の経費がかかります。これらはすべて信者の献金でまかなわれています。教会によっては、礼拝時にささげる「礼拝献金」だけで一切の必要をまかなうシステムの教会もあります。私たちの教会では、洗礼を受けて教会員になられますと、献金の目的別に、毎年二種類の献金袋（封筒）をお渡しし、本人の自主申告により、

次の名称の献金をささげていただいています。献金とは神様からいただいたものの一部を神様に感謝して返す行為です。

①「維持献金」・各人の収入の中から毎月定期的にささげる献金で、月定献金とも呼ばれます。聖書では収入の十分の一をささげる規定がありますが、これは当時の社会の税金と同じもので、公共の福祉の費用も神殿経費も、一切合財を含んでいた時代の概念です。私たちは十分の一という数字にこだわる必要はなく、各自の信仰に応じて、できるだけ多くささげたいものです。

②「特別献金」・サラリーマンの方で、夏と冬のボーナスが入る方は、それに応じて夏季献金、クリスマス献金をささげます。ボーナスがない方もおられるでしょうから、臨時の収入がある時、随時に信仰に応じてささげます。このほかにイースター献金もありますから、日ごろから準備しておくのが良いでしょう。

③「感謝献金」・人生の中で出産、快気、就職、洗礼、結婚、結婚記念日、誕生日、卒業、昇進、進級、進学など、特別に感謝な出来事があった時は、それを感謝の形であらわします。金額は問題ではありません。しかし一年間で一度も感謝献金がなかったなら、その人

の信仰生活には何も喜びがなかったということになります。日ごろから神様とどれほど近い関係を持っているかによって、この献金項目も多くなるでしょう。

④「大中会献金」・私たちの教派では、大会と中会から各教会あてに「負担金」の請求が来ます。これは大会の場合は、大会が経営する神学校や教師共済会、そして委員会活動や地域伝道に必要な経費を、各教会の経済力と会員数に応じて負担するものです。

東部中会の場合は、地方の小さな伝道所を応援するための伝道負担金、委員会活動の負担金などです。これはそれぞれの教会活動に必要なお金ではなく、教会外へ支払われるお金ですから、会員になられた方はまず、この献金を満たす努力をしていただきたいのです。もちろん収入のない方もおられますから、その分は他の教会員たちが分担してささげてください。

⑤「融資金返済献金」・私たちの教会は1999年から2001年にかけて、現在地に土地を購入し会堂を建てました。その時借り入れた融資金は、2019年までに返済することになっています。新しく会員になられた方は、その時点での会堂建築には参加できなかったのですが、この融資金返済献金をされることによって今、会堂建築に参加されているのです。

以上の献金は一つの献金袋に印刷されていますが、もう一つの献金袋には「改革派神学
研究所」「盲人伝道センター」「東北・四国伝道」と印刷されています。これらも対外献金
で、援助を求められている改革派教会の諸施設と諸教会です。会員の方はこれらの内容を
理解された上で、自主的にささげていただくものです。この封筒には裏面に「指定献金」
という項目もあります。これは各自が考えて、私たちの教会には、こういう活動のため
のお金が必要だと思われた時に、献金名を記入してささげていただくものです。

献金以外にも、私たちが教会を維持する活動があります。実は教会は歴史の中で、キリ
ストの栄光をはっきりと映し出さない時もありました。また日本では戦時下の教会のよう
に、はつきりとした罪を教会として犯していた時もありました。そのような時「教会を維
持する」私たちの責任には重いものがあります。教会の「活動に奉仕」ということは、
教会を主の御言葉によって見張ることもあります。洗礼を受けて教会員になり、会員た
ちの信頼を得ますと、教会役員に推薦されることもあります。その時は私たちは責任を与
えられて一層強く「キリストの体なる教会」に仕えていくこととなります。

教会とは私たちがそこで憩い、英気を養い、魂の充電をする所ですが、同時にこの世での戦いの根拠地でもあります。クリスチャンとはこの世の滅びの中から救われ、選び出され、「天に国籍を持つ者」(フリーピ書3・20)となり、この地上に再び「地の塩、世の光」(マタイ福音書5・13、14)として派遣された者、兵士です。それでは私たちが武器を補給する兵站基地^{たん}、要塞はどこにあるのでしょうか。それは教会です。私たちがこの戦いに勝つためには、前線にできるだけ多くの要塞を作り、そこから新たな兵士を送り出すことが必要です。

このことを文字通り表現している教派に救世軍という教派があります。彼らは組織と活動に軍隊流の名前をつけ、人の集まる所へ出かけて行って路傍伝道することを「野戦」と呼びます。これは信仰の戦いを前面に出した彼らの決意表明の表れでしょう。私たちはこの教派を尊敬しますが、教会の「聖徒の交わり」の面も重要視し、兄弟姉妹が心から愛し合うことのできる憩いの場としましょう。

6、あなたは、日本キリスト改革派教会の政治と戒規とに服し、その純潔と平和とのために務めることを、約束しますか。

日本には過去三回のキリスト教ブームがあったと言われます。第1回目は1549年、フランシスコ・ザビエルによるカトリックの布教で、1555年に初めて教会が建てられました。しかし豊臣秀吉、徳川家康によるキリシタン禁制令により、1619年までに日本にあったすべての会堂は破壊され、外見的には日本にキリスト教はなくなってしまいました。

第2回目は1859年の、アメリカからの宣教師たちの来日によるプロテスタントの布教で、1872年に最初のプロテスタント教会の会堂は横浜に建ちました。しかし1941年、時の軍事情報の命令で、すべてのプロテスタント教派は「日本基督教団」に統合させられ、教会には「大麻奉賛」（伊勢神宮から配布される神札を貼ったミニ神社を、会堂に設置すること）が義務付けられ、毎週の礼拝には警官が配備され、礼拝プログラムの中に「宮城遥拝」「君が代」がない教会は閉鎖されました。教団の最高責任者は伊勢神宮に参拝し、韓国の教会には神社参拝を強要しました。この時代、個々のクリスチャンは存在しましたが、教会とい

う組織はキリストの体ではなくなっていたのです。従って二回のキリスト教伝来はどちらも70年たつことなく、人の目には滅んだのです。

第3回目のキリスト教ブームは1945年、日本の敗戦と共にもたらされた宣教の自由で、世界中からありとあらゆるキリスト教諸教派が上陸しました。日本キリスト改革派教会は1946年、日本人独自の手で、過去の敗戦と教会の過ちの反省の上に創立された教会です。この教会が正しい姿を持ったまま2016年を迎えるなら、日本にキリスト教の新しい歴史が作られます。私たちは今度こそ正しい教会を立てねばなりません。

洗礼を受けたいと願う受洗志願者には、キリスト教の初歩教理や、誓約の6項目について、学びのコースが備えられます。この学びを終えた後、志願者は小会（牧師と長老が構成する会議）のもとに呼ばれ、受洗の願いが、まことの信仰から出たものであるか試問されます（政治規準76条2、1）。伝道所の場合は宣教師が試問します。これをパスした後、週報に洗礼式の予告がなされ、教会全体が喜びと緊張と祈りをもって、これを待ち望むよう勧められます。キリストの血によって一人の罪人が救われることは、地上の教会にとってはもちろん、天でも「大きな喜びが天にある」（ルカ15・7）のです。

洗礼は「口でイエスは主であると公に言い表す」誓約によって行われます。「人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです」(ローマ書10・9、10)。「公」という言葉が2回用いられているように、洗礼とは公的礼拝の中で行われるのが原則です。この礼拝はそれぞれの教会の小会の管理下にあります(政治規準76条2項11)。洗礼式は教会行事の中で最も公的で重要な礼拝儀式です。

天地の造り主であられる神を信じ、自分を罪人と認め、イエス・キリストを救い主と信じてより頼み、聖霊の恵みに信頼し、教会の礼拝を守り、これを維持することを公に誓約した者は、すでに洗礼を受ける十分な資格があるでしょう。しかし誓約は最後に、「教会を維持する」具体的な方法を示すことによつて、私たちの教会生活を、私たちがそれぞれ属す具体的な個々の教会に結び付けます。それが「日本キリスト改革派教会の政治と戒規とに服し、その純潔と平和とのために務める」ことです。

私たちは必ずどこかのキリスト教会で洗礼を受け、その教会に「会員」として登録されます。どこの教会においても、最も重要な仕事の一つは、会員名簿の管理です。

羊飼いは個々の羊がどういう状態であるか、健康状態、行動の癖、性格などをきちんと

把握しています。同じように教会の牧師と役員たちも、教会員の信仰状態を良く把握し、成長を促し成長させねばなりません。政治規準の「会員名簿」(75条)には、氏名・生年月日、現住所から始まって、何と14項目もの管理事項が明記されています。牧師は主から託された大切な羊を守り管理するから「牧師」なのです。

このように、信徒一人一人の育成と教育と保護が行われるのが教会です。教会を離れた信仰生活というのは原則的には有り得ません。「信仰の恵みは、…み言葉の宣教と礼典の執行と祈りによって増進され、強化される」(『ウエストミンスター信仰告白』14・1)。教会の「外には救いの通例の可能性はない」(同25・2)のです。

このように、教会に秩序を与え、教会の正しさを常に守るために必要なのが政治と戒規です。教会の政治とは教会の運営方法のことです。教会の頭(かしら)はイエス・キリストだけです。しかし地上の具体的な教会を運営するのに必要な権能を、キリストは誰に与えたのでしょうか。

教会の政治形態には大きく三つの種類がありますが、この権能が、キリストの代理人としての個人(およびその補佐集団)にあると考えるのが監督制(ローマ・カトリック教会

など)、会員総会にあると考えるのが会衆制（バプテスト教会など）、会員の中から選出された役員が構成する会議にあると考えるのが長老制です。日本キリスト改革派教会は長老制を採用しています。

個々の教会には、牧師と長老によって構成される小会という会議があり、教会行事と教会運営のほとんどを決定しています。一人一人のクリスチャンは、この小会の決定に従うことが求められます。今日の礼拝讃美歌は○番だが、私は○番の方が好きだからそれを歌うなどということは許されません。教会の秩序に従ってこそ、公的礼拝は成立するのです。

洗礼を受けたクリスチャンはその教会の現任陪餐会員となり、聖餐式にあずかることができます。またそれぞれの持つ賜物に従って、教会学校の教師、奏楽者などの奉仕にあずかることもできます。誰にどのような奉仕をさせるか、これも小会が行う教会政治の重要な仕事です。

またクリスチャンは、会員総会においては選挙権を持ち、教会政治の具体的な問題に一票を投じます。また被選挙権も持ちますから、人の信頼を得て長老や執事という役員に選ばれることもあります。長老に選ばれますと「戒規」を執行する側になります。「戒規」と

は何でしょうか。

「戒規」とは教会における裁判とその判決のことです。「十戒」や「信仰告白の誓約」に明らかに違反した行為が教会の中で行われている時、教会はキリストの榮譽と教会の聖さを守るために戒規を執行します。戒規には口頭で注意を宣告する軽いものから、聖餐式にあずかることを禁じること、役員職務を休止させること、と重くなつてゆき、一番重いのは除名です。これらは教会の「純潔と平和」を守るためになされるものです。

悪魔は様々な方法を用いて教会を攻撃します。会員どうしの間にいさかきを起こさせたり、異なつた教えを忍び込ませたり、妬みや名譽欲を人の心に注ぎ入れます。しかし最も悪魔が効果的に用いるのは「怠惰」と「無関心」でしょう。私たちは自分の教会が今どのような靈的な状態であるのか、常に関心を持たねばなりません。そのためには教会のために祈ることがとても重要です。牧師のために、長老・執事のために、教会学校の奉仕者たちのために祈りましょう。また奏樂者、病人、長く礼拝を休んでいる者たち、最近来なくなつた求道者のために祈りましょう。高らかな讚美と熱心な祈りが響いている教会には、悪魔の付け込む隙はありません。

終わり。